

大阪で南京映画祭、のべ 600 人の市民が参加

12月2日、エルおおさか南館ホールで「南京の記憶をつなぐ」映画祭が、銘心会南京、日中友好協会大阪府連、NPO大阪府日中友好協会、大阪城狛犬会等多数の市民組織・個人による実行委員会主催で、開催されました。午前9時50分から終映16時30分の長丁場。

日中戦争下、1937年12月13日南京に繰り広げられた日本軍によるホロコーストと集団レイプ、私たちが決して忘れてはならない加害の歴史と、なんとこのべ600人の市民が「対話」をされました。うち165人前後の方々から4篇のドキュメンタリーを通してご覧になったこと、本当に頭が下がります。

アルファ財団製作の「アイリスチャン・レイプ・オブ・ナンキン（103分）」の中で、チャンが捉えた日本の学者による「虐殺なんてなかった」、「レイプは嘘です」という空虚で下品な言説。会場には失笑が。

南京の象徴花、「紫金草」を冠した合唱団による「紫金草の歌」演奏も大評判となりました。

4カ月かけた準備と学習、大小集会で配布した1万近いチラシ、紙面を割いて紹介を惜しまれなかった報道機関、12月のこの時期、大阪に「南京の記憶をつなぐ」が定着してまいりました。実行委員会は2019年の「南京の記憶をつなぐ」集いを12月1日に開催することを決めています。

上映作品他の三篇は、銘心会南京代表松岡環さんが製作・監督した「南京の松村伍長（30分）」、「南京引き裂かれた記憶（88分）」と江蘇電視台作品「証言者・張秀紅（40分）」。

各作品の貸し出しお問い合わせは大阪府連に。



写真は、参加者と舞台は、南京大虐殺の加害をテーマに贖罪と平和への願いを合唱朗読で歌い続けている「紫金草合唱団」の合唱